
とある高校生がネットゲの世界に転生したようです

アヲネギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある高校生がネットゲの世界に転生したようです

【Nコード】

N9672Z

【作者名】

アヲネギ

【あらすじ】

常日頃から『異世界に行きたい、できれば最近ハマってるネットゲの世界が希望。チート能力ももちろん欲しい。まとめるとテンプレ展開で転生したい』と思っていたちよつと残念な高校生、七海綾乃はある日テンプレのような展開で生前にプレイしていたオンラインゲーム『ホロスオンライン』の世界にチート能力を持って転生することになった。これはそんなお話。

1話 彼は転生するようです

『異世界とか行ってみたい』

そんなことを週に七日は考える俺はネトゲが趣味の普通な高校生。
名前は七海綾乃^{ナナミ アヤノ}。

男か女かわかりにくい名前だけど、男だ。

とりあえず俺、七海綾乃はものすごく異世界に行きたい。

次の日、目が覚めたら〜とかこっそり期待してる。

なんでかって？

そんなの日常生活は面白くないからに決まってる。

できれば日ごろからプレイしてるネトゲの世界に行きたい。

神様が何かの手違いで俺を殺しちゃってそのお詫びにネトゲの世界に転生させてくれるとか

しかも生前に自分が使っていたキャラに転生させてくれるとか
おまけに何かチートな能力もくれちゃったり

毎晩寝る前に「明日目が覚めたら異世界にいますように！」って祈
ってるんだけどね。

毎度毎度爽やかな朝を迎えるわけで・・・

ちなみにそんな俺は現在、学校から帰宅中。

もっと細かく言うと、横断歩道の信号待ち。

ここを渡れば家だというのにこの信号が長い、長すぎる。

はやく帰ってネットゲがしたい！

今日は知り合いのレベル上げを手伝う約束があるんだ！

初心者狩りから守ってやらねば。でも自分よりもレベルの高い初心者狩りのPKとかだったらちょっと困るな。

その時は知り合いを捨てて逃げよう。知り合いを守って自分がPKされるなんて嫌だしねー

PKされたら所持してるアイテムがランダムでどれか一つ落とすからな。愛用の武器とか落としちゃったら泣ける。

・・・よし！青になった！

さあ家はもうすぐだ！

もう走るしかない！

ブーッ！

え？クラクション？

反射的に音の方を見る。

「あ・・・」

なんとまあ、信号無視のトラックが突っ込んできていた。

ヤバイヤバイ、避けないと。

でもどうやって避ける？

現在俺は横断歩道のド真ん中。渡りきるもの戻るのも同じ距離だけ

ど、多分どっちにしろ間に合わない。

トラックの方が速いからねー

いや、ここで俺が死んで転生という選択肢も・・・

ここでトラックとぶつかって死んで、あの世で神様が「お前はまだ死ぬはずじゃなかった」とかそんな感じの事言っでどっか別の世界で転生！とか？

とりあえず、選択肢は・・・

1・引き返す（多分間に合わない）

2・進む（多分間に合わない）

3・このまま轢かれるか、はねられるかして死ぬ。そしてチート能力をもらって転生（マジオススメ！）

ふむ、このくらいかな。

まず1は無い。

引き返したら家に帰るのが遅れる。ほんの少しだけど。

そしてまず引き返すよりも先にトラックとぶつかる。

そして2。

進むにしても横断歩道を渡りきる前にトラックとぶつかる。

となるとやっぱり3だ！

俺はトラックの方を向いて両手を広げる。

よしこいトラック、抱きしめてやる。全力でぶつかってこい！そして俺を殺してくれ！
いや別に自殺願望とかがあるわけじゃないよ？
俺は死んだ後にチート能力をもらって異世界に転生したいんだ。

心残りなんてない！

しいていうなら今日の約束を守れないこととその埋め合わせができないくらい！

いや、埋め合わせはする！あのネトゲの世界に転生してレベル上げを手伝う！

あとは一度でいいから彼女とか欲しかったのとキスとか一度でいいからしてみたかった！

それと告白されたり、バレンタインにチョコとかもらってみたかった！

・・・心残り、結構あったわ。

でもまあチート能力もらって転生できる事に比べたら安いもんだ！
まだ決まったわけじゃないけどね。
もし無理でも神様に頭下げまくってチート能力もらって転生させてもらおう。

さあそろそろトラックとぶつかるかな。
案外長かったね。

人生最後の言葉は何にしようか。なんかカッコいい台詞とかがいいけど特に思いつかない。
しかし無言で死ぬのはちょっとなあ・・・

よし、特に思い浮かばないから今思っている事を叫んでみよう！

「レッツ異世界！」

これが俺の最後の言葉となりました。

気がつくと、俺は床も壁も真っ黒な場所にいた。いや床とか壁があるのかわからないけど。

なんせ真っ黒だからねー

床も壁もない空間なのかもしれないね。だって今自分が「立っている」って感じがしないし。

なんていうか、水中にいるような浮いてるような。

いやそんなことはどうでもいいんだよ。

神様はどこにいるんだ？

俺にチート能力をくれて転生させてくれる神様はどこにいるんだい？

????「うーっす。神様でーす」

後ろから声がしたから振り返る。

おお！

そこには真っ白な人の形をした光の塊があった。わかりやすく言うと、真理の扉の中にいるアイツみたいな。

「どちら様？」

神様「神ですが何か？」

なるほど。

神様「えー、クノスズキ 鷹四季サンだな？お前は寿命よりも長く生きすぎです。よって俺が殺しました」

え、誰それ？

鷹四季？知らないよそんな人。

「いやいやいやちよっと待って」

神様「なんだ？」

「鷹四季じゃないよ俺は」

神様「え？マジ？」

表情はよくわからないけど、なんかびっくりしているらしい神様。アレか、俺は間違って殺されちゃったパターンか。

神様「いやいやいや。鷹四季サンでしょ？」

「違いますけど？」

だから誰だよ鷹四季って。

同じ苗字の知り合いならいるけど、下の名前は四季じゃないな。

神様「えー・・・」

表情はよくわからないけど、なんか困ってるらしい神様。
はやく俺を転生させて！あとチート能力も！

神様「もう一回聞くけど」

「なんぞ？」

神様「お前マジで黛四季サンじゃないんだよな？」

「マジだぜ」

俺がそう答えると神様は頭を抱えた。なんか悩んでるようす。
ていうか誰ですか黛四季って。

神様「どうすりゃいいんだよマジやべえよ・・・」

うん、なんか悩んでる所悪いけど俺はこの後どうなるのか聞いてみ
ようか。

そして上手いこと話の流れをチート能力&転生の方向に持っていく！

「俺はこのあとどうなの？」

神様「え？あー・・・そうだな。先にお前をどうにかしないとダメ
だよな」

お、いい流れ！

神様「どうするっ？どっかに転生するか？」

計画通り・・・！
テンプレきたこれ！
俺は今すごい悪人顔でニヤけてるだろう。多分黒いノートを持っているあの人のような顔をしてる。

「え！マジ！？」

とりあえず大げさに驚いてみる。

神様「どんな世界がいい？希望があるならいろいろおまけするぞ？」

これまた計画通り。

「なら俺が生前にプレイしてたネトゲの世界に転生したい。あとなんかチートな能力を俺は所望する！」

さあもうすぐだ。

もうすぐ俺の長年の夢は叶う

神様「まずは転生先からだな。そのゲームの名前は？」

「ホロスオンライン」

プレイ人数はなんと2億人という大人気のオンラインゲームだぜ？
すごくね？

神様「あー、おっけ。VRMMORPGだと楽だからよかったわ。

ああいう仮想空間にダイブしてプレイするタイプだと転生も楽なんだよな」

お、神様も知ってるのか。
さすが大人気オンラインゲーム。

神様「そうそう、お前自分のアカウントあるよな？」

「あるよ」

なかつたらネトゲの世界に転生したいと言わないよ。
名前だけしってるゲームの世界に転生したいとは思わないなあ。

神様「じゃ、生前使用してたキャラに転生する感じでいいよな？」

まじか！

自分のキャラに転生できるとは……

「なんとという僥倖ッ！トラックに轢かれた甲斐があったというものッ！」

轢かれたのかはねられたのかはいまいちハッキリしてないけどね。
まあどっちでもいいか。

えーっと、ネトゲの世界に生前に自分が使用してたキャラとして転生するってことは所持品、お金、ステータス、スキル全てを引き継いだ上で俺の新しい人生がスタートする感じ？
まさに強くてニューゲーム。最高すぎるやべえ。

何週もできるゲームのようなことをまさかホントに体験できるとは。
それが俺の夢でもあったけど。

神様「……とりあえず、転生先の世界はホロスオンラインで、転

生ずる自分の新しい肉体は生前使用していた自分のキャラで大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない」

やべえ楽しみすぎて夜しか眠れない。今が何時なのか知らないけど。

神様「で、次はチート能力の方だけど」

まってました！

あのゲームの世界で生きていけるような素晴らしいチート能力を期待するよ。

神様「希望はあるか？」

おお、決めてもいいのかい？

どうしようか、どんなのがいいかなー

HP、MPが減らないような能力？

一撃でどんな敵でも倒せるような能力？

所持金、消費アイテムが無限になる能力？

全ての職業の全てのスキルを使えるようになる能力？

モンスターの召喚を街の中でもできるようになる能力？

武器とかアイテムを作り出すことができる能力？

ドロップする確立とかアイテムを操作できる能力？

迷うなー、どんなのがいいかな？

いや、いっその事全部でいいかな？いいよね？

えーっと、なんて神様に言おうか。

全部言うのはちょっと長くてダルいし・・・

「なんでもできる能力でお願いします！」

間違っではないはず！正しく伝わると信じてるぜ神様！

神様「なんでもできる能力ね、はいはいおっけー。あ、デメリットとか何もないから安心しろよ」

え、マジでできんの！？

デメリットなしとかさすが神様やることが違う！
というか他の人はこんなことできないね。

神様「他にはもうないか？」

他にはー・・・もういいかな？

なにもないはず！

でもちよつと気になることを聞いておく！

「転生とは関係ないことだけど、黛四季って誰？」

気になってたんだよねー

なんで間違われたのかとかさ。

・
あと確か神様は「寿命よりも長く生きすぎた」って言ってたけど・・・

神様「あー・・・まあ、一言で言えば「なんでもできる人間」だな」

ほう、それは興味深い。

でもそれと「寿命よりも長く生きる」っていうのは関係なくね？

神様「「なんでもできる」「っていうのは本当の意味でだ。自分の寿命を消したらしくてな」

え、それってすごくない？

ガチでなんでもできるって事か。てつきり運動ができて勉強もできて家事全般もできてすげえ可愛い子なのかと思った。

神様「他にはなにもないのか？」

「ないかな」

質問とかよりも早く転生したい。転生してゲームの世界で自由気ままに生きるんだ俺は！

ほら、誰でも一回は思ったことあるじゃん？「ゲームの世界に行ってみたい」って。

ゲームの世界に俺はもうすぐ行ける！ああ楽しみだ！

神様「じゃ、目を閉じる。次に目を開いたらお前の望んだ世界だ」

おお、ついにきたか！

さあさあさあ！盛り上がってまいりました！やっべえ楽しみすぎる！とりあえず目を閉じないことにはなににもはじまらないね。

俺は言われたとおりに目を閉じる。

なんかわくわくしてきたぜ！うっへへ！

神様「じゃ、がんばれよー」

そういつて神様が指パッチンをすると、俺の意識は遠のいた。

・・・指パッチンすると爪の横が痛くなるのは俺だけかな？

1話 彼は転生するようです(後書き)

こんにちは、アヲネギです。

まだ完結していない小説があるのに書き始めました。

書きたくなったら書く！これが一番ですねw

しかし2000文字を目処に書いていたのになぜ4000以上にな
ってしまったのか・・・

誤字脱字、分かりにくいところがあったら教えてください。

感想お待ちしてます！

2話 夢じゃなかったようです(前書き)

こんなオンラインゲームやってみたい!と思って書き始めました。
なんか似てるゲームないんですかね?

2話 夢じゃなかったようです

「夢じゃない・・・だと・・・」

気がつく俺は、先日ログアウトした場所、街の中心の大きな噴水のある広場の隅っこにいた。

「お、おお・・・」

自分の両手をみて俺は驚く。

おいおいマジで転生できちゃったよ！やべえよ！うっへへ！
マジで俺のアバターの『アヤノ』だよ！

名前そのまんまとか言うな！ネーミングセンスがないんだよ俺は！

とりあえず場所を変えよう！

いろいろ確かめたいことがあるからね！

で、そんなこんなでやってきました街の外れにある路地裏。

さっきまでいた街の中心の噴水広場からだいぶ離れた場所にあるこの裏路地はほとんど人が通らない。狭いし、この先は行き止まりだから当たり前といえば当たり前なだけだね。

ちなみに俺がいまいる街の名前は『アルパ』っていう名前だよ。水の街で建物は全て白を基調とした石造り。

初心者が最初に訪れる街でもあるよアルパは。昨日は知り合いのレベル上げを手伝って、その後すぐにログアウトしたからここに

る感じ。

いやあ、それにしてもすごいリアルだね。水がすごい綺麗だ。水だけじゃなくほかにもいろいろ綺麗。

ゲームを普通にプレイするのは比べ物にならないくらいリアル。マジ現実。

よし、それじゃアイテムを確認してみよう。

プレイしてた時と一緒でイメージするだけでアイテムバグの確認ができるかな？

「・・・おお、おお！」

できた！できちゃったよ！

すげえ所持品、所持金もそのままだ！

じゃ、次はステータスの確認だ！

・・・よしできた！

特に変わりはないね、レベルは253、種族は人間、職業は^{アンノ}***^{ウソ}。
*。

うん、問題な・・・ある！問題あるよ！職業が^{アンノウソ}***^{アンノウソ}になつて
^{プレイド}！刀剣使いだつたはずなのに^{アンノウソ}***^{アンノウソ}になつてるよ！？***^{アンノウソ}つ
て何なの！？

バグか？バグなのか！？

まあなんでもいいか！特に問題なさそうだし？

攻撃力とかはそのまんまだから別に大丈夫でしょ。

そうそう、レベルの上限は1000だよ。200が上限だと思ってたけど、知り合いの一人に400前後のヤツがいてびっくりしたよ。

そいつから上限は1000って聞いたんだよね。

ちなみにこのゲーム。職業が結構あるけど、それによって装備することができない武器はない。
どの武器の扱いに長けるかっていうだけなんだよね。

たとえば魔道士メイジとか治療士ヒーラーが大剣を振り回すなんてことも可能だし、刀剣使いフレイドや銃を使うことも可能だし銃使いガンナーや拳闘士グラップラーが剣や刀を使うことも可能。

ただ、与えるダメージはその武器の扱いに長けている職業と比べたら劣るけど。

習得できるスキルも同じで、大剣士フレイカーと魔道士メイジが同じ魔法を使っても、魔道士メイジの方が効果は大きい。
でも職業によって習得できないスキルはない。

ちなみに昨日までの俺の職業、刀剣使いフレイドは刀剣類が一番適している装備。名前のとおりだね。
スキルも刀や剣を使うものが与えるダメージが大きいよ。
魔法はそんなに効果は大きくないけど、小さすぎるわけでもない。
中の下くらいかな。

「うーん」

アイテムバッグにステータス、他にはなにか確認しておきたいものはあったかな？ないよね？

特に思いつかないってことは別にそんな重要なことでもないよね。

ああ、あったよ。チート能力だ。

で、どうやって確認すればいいのかな？スキル画面で確認できるか

な？

えーっと、メニュー画面を開いてスキルの確認・・・

・・・

・・・

・・・

ないね。

あの神様ホントにチート能力くれたのかな？心配になってきたぞ。

ちなみにスキルは全部で二万くらいの種類があるよ。俺が習得してるのは200個前後だけど。

あと限定スキルっていうのもあるらしいけど俺はそんなの持ってない。イベント限定なのがほとんどらしい。もちろん全部で何種類なのかも俺は知らないよ。

うーん、チート能力はてつきりスキルに分類されると思ったけど違うのかな？

メニュー画面に新しい項目が増えてたりはしないよね？

・・・

・・・

・・・

ないね。

どうしよ、どこにあるんだチート能力！

設定の項目か！設定なのか！？

・・・

・・・

・・・

「お、おお！」

あつた！あつたよチート能力の項目が！

その名も『チート能力についての説明』！って説明だけかい！いや十分か！

とりあえず開こう。そして読もう。

ふむ、まず能力の名前。

『システム・ワード支配者の言葉』。 かけえなおい！うっへへ！

で、効果は・・・

『とりあえず言ったことが現実になる。説明とかめんどいからいくつか例を書いておいた。参考にしろ。by神様』

あの発光野郎め、手を抜きやがったなコンチクショウ。

・・・とりあえず、例を読もう。

『例（自身をアルパの噴水広場にワープさせる場合）：ワープ、ア

ルパ、噴水広場前、自身のアバター名。これで自身をアルパの噴水広場前にワープさせることが可能』

『例（自身のHP上限を10000アップさせる場合）：HP上限アップ、10000、自身のアバター名。これでHP上限が10000増える。MPも似たような感じでいける』

『例（自身のHPを10000回復させる方法）：HP回復、10000、自身のアバター名。MPも似たような感じで回復できる』

『例（欲しいアイテムを入手する方法）：アイテム入手、アイテム名、自身のアバター名。イベントアイテムとかもできるぞ』

『例（椅子とか机とか家とか、要するにアイテムバッグに入らないアイテムを目の前に出現させる方法、ここでは椅子とする）：椅子、出現、自身のアバター名、目の前。これで椅子が目の前に出る』

『例（好きなだけ金を入手する方法）：ルゼ入手、任意の数値、自身のアバター名。これで大富豪になれるぞ』

『例（対象のプレイヤーをログアウトさせる場合）：ログアウト、対象のプレイヤー名。これで嫌いなやつをログアウトさせることができる。乱用すると嫌われんぞ。でも個人的にかなりオススメ』

『あとはいろいろ応用したりしてがんばれ』

なるほど、これは便利だ。

そして対象のプレイヤーをログアウトさせる方法だけやけに簡単なところにあの発光野郎の悪意を感じる。

ちなみにこの世界の通貨単位はルゼ。なんか言いにくいよね。

例はこれだけかな。

しかしこれだとホントになんでもできるね。

どれ、ちょっと試してみようか。何がいいかな？

金か？やっぱ金か！？金だよな！？金しかねえわな！

えーっと、言うだけでいいんだよねアレを。

とりあえず百万ほどやってみよう！一気に金持ちだ！やっふうふう！

「ルゼ入手、1000000、アヤノ」

これで増えてんのかな？

ちよつと確認してみようか。

・・・

・・・

・・・

「す、すつげええええええええええ！」

マジで所持金増えたよ！おいおいやべえよ！

よし、それじゃあ応用してみようか！

「所持金MAX、アヤノ」

これで所持金MAXなるか！？

「くあwせdrftgyふじこ1p;@:」

やべえよ！MAXなっちゃったよ！

もう自分で何言ってるのかわかんねえ！うっへへ！

なかなかイカすチート能力だねこれは！やっべえわ！うえへへへ！

それじゃ、次の項目の『はじめに』を読んでみよう。

ちよっと待てなんで『はじめに』が一番最初じゃなくて最後にあるんだよ！おかしくね？

えっと、箇条書きになってるね。

全部読もうか。

・ゲームの世界とはいえ、腹は減るし喉も渴く。

・もちろん何も飲まず食わずだと死ぬ。

・死んでも結局のところ「ゲームの世界」だからやり直せる。

・どの辺りからやり直すのかは自由を選ぶ。

・「強くてニューゲーム」とかも可能。

・マップの外にもその気になれば行ける。

・・・死んでも死にきれないとはこのことか！復活できるんだね！

その辺はさすがゲームと言わべきか！

つまり寿命以外で死ぬことはないのか。あ、でもゲームだから寿命とかもないのかな？

あの発光野郎、自らの手で第二の四季ちゃんを作り出しちゃったよ。神様の手によって寿命がなくなるのは別にいいのかな？あ、いや、そもそもゲームだから寿命って言う概念がそもそもなかったり？まあいいや。

あと最後の『マップの外にもその気になれば行ける』っていうのはちょっと気になるな、ほとんどのゲームにあるエリアの端の『みえない壁』を超えることが可能って解釈で間違いないのかな？

うーん、食料はどうにかなるかなあ。素材屋とかに売ってる『人面リンゴ』とかでもいいのかな？

ちなみに素材屋っていうのは、錬金術に使用する素材を売ってる店だよ。

で、錬金術っていうのは複数の素材を混ぜ合わせて一つにすること。薬とかね。

うん、とりあえず素材屋に行ってなにか食べ物を買おう！

2話 夢じゃなかったようです(後書き)

こんにちは、アヲネギです。

そうです、またチートなんです。

一応『チートな高校生が異世界でがんばるようです』の主人公の彼ほど凶悪なモノにならない予定ですw

誤字脱字、分かりにくいところがあったら教えてください。
感想お待ちしてます。

3話 彼はマジスタイリッシュのようです

「えー、素材屋は確かこの辺に・・・あった!」

やってきました素材屋。場所は噴水広場とさっきまでいた路地裏との丁度中間あたり。

ゲーム内のアイテムを実際に食べられるとかちよっとテンション上がるよね! うっへへ!

とりあえず店に入ろう、入ってからなにを買うか考えよう。

数分後

よし! 買ってきたよ人面リンゴ! 5個ほど買ったよ! さっそく食べよう!

あ、でもこの場で食べたら目立つかな? 別にいいよね? 問題ないよね?

というわけで人面リンゴ、食べます!

アイテムバッグから人面リンゴを一つ取り出して・・・

・・・

・・・

・・・

うん、普通のリンゴと味も食感も同じ！人面っただけで他は普通のリンゴと変わらない！

いやあ、リンゴうめえ！ゲームの世界マジやべえ！

しかし素材屋の店員さん可愛かったなあ。金髪のショートヘアに青色の瞳！可愛いかった！

ちなみに街には『商業地区』っていう店がたくさんある地域がある。武器屋とか道具屋とか素材屋とか宿屋とかがあるんだよね。

それにしても人面のリンゴってなかなかイカすな。美味しいし。

5個じゃなくて20個くらい買えばよかったかな。お金は山ほどあるんだし。

ま、なくなったらまた買いに行こうかな。でもリンゴばっかじゃ飽きるよねえ。何か他にもあったかな。錬金術なんて俺はしないから素材屋に立ち寄ることもないんだよね。たまに貧乏な知り合いに頼まれて素材屋に行くくらいだからなあ。

「・・・あ」

そういえば、マップの外ってどうなってんだろう？NPCの居住区とかあったりするのかな？やべえちよつと見てみたい。

「行くしかねーわなこれは！」

うっへへ！『ハイジャンプレベル3』と『空中ジャンプレベル2』のスキルを上手く使えば建物くらい飛び越えられるはず！

ちなみにスキルは全てレベル10まであるよ。あと、街中では攻撃系スキルは使用できないよ。街中で使用できるスキルは移動系のスキルと回復系のスキルだけ。

もちろん『ハイジャンプ』も『空中ジャンプ』も移動系スキルだけ。他にも『ダッシュ』や『空中ダッシュ』っていう移動スキルもあるよ。これは高速で短距離を移動するスキルで、接近戦がメインの職業だとかかなり重宝するスキル。間合いを詰めるのにも避けるのにも使えるからね。しかもダッシュは発動中は無敵っていう。おまけに移動系スキルはほとんどがMPを消費しないというスグレモノ！MPを消費する数少ない移動系スキルは『レポート』とかだね。名前の通り、任意の場所にワープできるスキルで、目的の場所が遠ければ遠いほどMPの消費がデカくなる。

ま、そんなことよりもはやくマップの外に行こう。さっきの路地裏からでいいかな。あそこなら人に見られて怪しまれる心配もないし。

はい、そんなこんなで戻ってきましたさっきまでいた路地裏に！一番奥の行き止まりまできちゃったよ！
さあ飛び越えるぜ！目の前にある建物を！

「フッフウウウウ！」

ハイジャンプしてからの空中ジャンプ！

「あとちよつとおおおお！」

あと少し届かない・・・だと・・・
しかし！こんな所で諦める俺ではないっ！

「まだまだ！まだ終わらんよ！」

壁を蹴つてもう一度ジャンプ！すげえ俺マジスタイリッシュ！

「……よし！」

無事のほりきった！

さあマップを確認しようか！今俺のいる建物の上は……マップの外！やったぜ！ついにきたぜマップの外に！

ちなみに壁ジャンプなんてスキルはない。俺が『壁ジャンプ』というスキルを習得していないんじゃないかと、『壁ジャンプ』というスキルがこのゲームには存在しない。『壁を蹴ってジャンプとかできんじゃない？』と思ってやけくそ気味にやってみたらできた感じ。

「あ、なるほど！」

これがプレイヤーとの違いか！転生した俺にはプレイヤーじゃできないような行動アクションが可能なわけだね。

例えばさっきの壁ジャンプとか、街にあるオブジェクトを持ち上げて動かしたり。

いやあ、それにしてもついに来たか。マップの外に。とりあえずこの建物から降りようか。もちろんマップの外側の方にだよ。

「なんとっ！」

ここからマップの外に降りるために、建物の上を歩いていてびっくり。

景色がね、すごくいい。夕方なのもあってめっちゃ綺麗！

「なんとという絶景！素晴らしい！」

もう叫ばすには言われない。

???「君！そんなところにいるのは危ないぞ？」

おっと、下から声が。

声のした方を見てみると、アルパのいたるところで見かける甲冑を着た兵士のような姿をした案内役のNPCだった。

「すんませーん！いまから降ります！」

俺のとつた行動はもちろんそのまま飛び降りる。5、6メートルの建物だけど問題ないでしょ。このゲーム、落下によるダメージはないんだし。

「フッフウウウウ！」

もう空中でバク転とかしちゃう。今の俺テンションMAX！
そして着地。見事に兵士のNPCの目の前に着地できた。

「いつてえええええ！」

そして足首に激痛が走る。え、ダメージないはずなのになんで！？
あ、転生したからこの辺は生身の人間と変わらないのか。

兵士「君、この辺りじゃ見かけない顔だね。どこから来たんだい？」

まったく心配していない様子の兵士さん。しかしどこから来たと聞かれてもなんて答えればいいんだか・・・

そのまんまでいいかな。

「この建物の裏からきますた」

間違っではないいよね。

兵士「建物の裏？君、普段はなにしてるんだい？」

まさかの職質！？

別に怪しい者じゃないんだぜ俺は！

「普段はレベル上げとか知り合いのレベル上げを手伝ったり、ですかね」

兵士「プレイヤーかい君！？」

俺の言葉を聞いて兵士はなぜかびっくりする。ていうかNPCってこんな会話できるんだね。俺はそこにびっくりするよ。

あ、プレイヤーはマップの外に出られないからびっくりしてるのかな？

「元プレイヤーです、そして今はこのゲームの住人です」

兵士は俺が何言ってるのかわからないような顔してる。まあ当然といえは当然なただけ。

兵士「・・・君、ちょっと来なさい」

なんとっ！？これは所謂『署で詳しく話を聞かせてもらう』的な展開か？

俺はこれから牢屋で生活するハメになるのか！？はやくね？俺まだ

何もしてなくね!?

などと一人で考えていると・・・

兵士「大丈夫大丈夫、すこし話を聞かせてもらっただけだから」

と、笑顔で言ってくれました。

いやいやいや!そうじゃなくてさあ!てか何もしてないのになんで焦ってるんだ俺は!?

3話 彼はマジスタイリッシュのようです（後書き）

明けましておめでとございます、アヲネギです。

年内にあげる予定でしたが、間に合いませんでした。

サブタイトル、ちょっと意味分らないですねww

なんかスタイリッシュってという言葉の響きがすきなんですw

誤字脱字、分かりにくいところがあれば教えてください。

感想もお待ちしております。

4話 彼はマップの外へ進出したようです

連れてこられたのは刑事ドラマとかでよく見る取調べ室のような部屋。どうしてこうなったし。

兵士「それじゃ、詳しく聞かせてもらおうよ」

「えーっと・・・何から話せばいいんですかね？」

まず何で連れてこられたのがイマイチ分からない俺には何を話せばいいのかも分からないわけでして。

というかNPCすぎるすぎるだろ！職質のシステムとかいらねいだろ！誰得だよ！

兵士「元プレイヤーっていうのは、どういう意味だい？今はプレイヤーじゃないのかい？」

「今は違いますね。この世界にしか存在していないっていうか、この世界に生まれ変わったというか・・・」

この言葉を聞いた兵士さんは腕を組んで考え込む。なんか一人でぶつぶつ言ってる怖い。

兵士「ふむ、なら次の質問だ。君がプレイヤーだった頃のレベルと種族と職業を教えてくださいもいいかな？」

・・・もしかしてこれは運営の不正行為を発見するためのシステムなのかな？

しかし！『プレイヤーだった頃』なら何も問題はない！

「レベルは253、種族は人間、まあ見ての通りですね。職業は刀剣^{レイド}使いでした」

これを聞いた兵士はまた考え込む。そしてまた一人でぶつぶつ言いはじめたよ。

今は^{アンノウン}*****です！とか言えるわけない。言ったら運営にアカウントを削除されるかもしれないし。転生して数時間でまた死ぬとか嫌すぎる！

兵士「・・・君、もしかして名前はアヤノ、じゃないのかい？」

「なぜばれたし」

レベル、種族、職業がかぶってるヤツなんて山ほどいるだろうに。

兵士「やはりそうだったのか！姫様の予言の通りだ！」

え、何？姫様？

姫様って感じのNPCなんていたっけか？

・・・

・・・

・・・

ああ、いたね。アルパのイベントの時のみ出てくるNPCだ。確か予言ができるのかなんとか。アルパのイベントは参加したことないから詳しくは知らないけど。

ていつかNPCとこんなに話したの初めてなんだけど。

兵士「君には少し悪いんだけど、今から少し姫様と会ってもらえないかな？」

そうきたか！俺も少し気になってたんだよねー

「いいですよ、城に行けばいいんですか？」

兵士「案内するよ、ついてきてくれ」

で、やってきました城に！うっはー！でっけえ！マジファンタジー！

そして姫様は城の前にいました。いいのか姫様が出歩いちゃって。

あ、周りにやたら豪華な鎧を装備したNPCが4人ほどいるから大丈夫なのかな？ちなみに今その四人の兵士は俺と姫様を囲むようにして立ってるよ。あ、兵士は俺を城まで案内したらすぐに戻っていったよ。なんでも仕事が残ってるとかなんとか。ていつか姫様マジ美人。茶髪のセミロングに青い瞳！可愛いね！

姫様「初めまして、アヤノ様。私はセリアと申します。貴方がこの世界に来られるのを待っております」

おおう、随分と礼儀正しいね。

俺も礼儀正しく返したほうがいいのかな？そいつの結構苦手なんだけど。

「こちらこそ初めまして姫様。自分が来るのを待っていたとはどういう意味です？」

軽く頭を下げつつ、なるべく失礼のないように意識して挨拶してみる。うつへえ・・・息詰まるわ！

セリア「そんな堅くならないでください。それと私のことはセリアと呼んでくださいアヤノ様」

と、笑顔でいう姫さm・・・セリア。笑顔が素敵！まぶしい！

「OK、ところで俺が来るのを待ってたっていうのは？噂の予言？」

おお・・・周りの四人の兵士の視線が怖いぜ！怖いというか痛い！視線が痛い！もっと礼儀正しくしろと言いたげな目で俺を見てるよ！そのうち刺されたりしそうで怖い。

セリア「はい、私には未来を予知する力があるのです。アヤノ様、貴方がこの水の都アルパへ来られ、この街を救ってくれるという未来を私は予知したのです」

ふむ。街を救う云々はともかく、この街に来るっていうのは俺が転生する事を知ってたって解釈でいいのかな？それにしても様付けで呼ばれるのはなんか慣れないね。

「えーっと、俺がこの街に来るのを知ってたっていうのは？」

ちょっと詳しく聞いてみようじゃないか。

・・・また周りにいる四人の兵士の視線が怖くなったのは気のせいだと思いたい。ていうか視線が怖いつて日本語になんか違和感を覚

えるのは俺だけかな？

セリア「アヤノ様がこの世界とは異なる世界で亡くなられて、この世界に来ることを私が予知したということでございます」

おお、やっぱり転生の件だったか。ていうかこのゲームのNPCすごいな。個性ありすぎだろ。プレイしてた時に気づかなかっただけ・・・じゃないよなあ。NPCはほとんど表情なんて変わらなかつたよ。うな気がするんだけど。

「なるほど、それなら街を救うってというのは？」

周りの兵士からの殺意を感じるよ！そのうちマジで刺されそうだ。

NPCは街中で武器とか出せるのかな？出せたらヤバイよね、俺は武器を街中では装備できないし。

セリア「これも私が予知した事なのですが、今このアルパを困らせている魔物をアヤノ様が退治してくださる未来を予知したのです」

魔物退治かー。なんか王道RPGのような展開だね。嫌いじゃないぜ、こういうの。というかセリアは俺に向けられた殺意に気づかないのかな？気づいてるんならどうにかしてほしい。わりとガチで怖いから。

「街を困らせてる魔物・・・街の雰囲気はともそんな風じゃなかつたけど？」

プレイヤーはいつも通りな感じだったし、マップの内側、プレイヤーがいる地域にいるNPCも特に変わった様子もなかったし、そんなイベントがあるなんて俺は知らないよ。

兵士の一人「さっきから黙って聞いていれば貴様！言葉遣いに気を
つける！」

うおっ！いきなり腰に提げてたサーベルを抜いて刃先を俺に向けて
きたぞ！ちなみに、俺の左斜め後ろにいた兵士だよ。

言葉遣いに気をつけるといわれてもなあ、セリアに普通でいいとい
われたからねー

セリア「シス、武器を収めてください」

あ、この兵士の名前はシスっていうんだ。

シス「しかし！」

セリア「・・・」

姫様の無言の圧力やべえ。

シス「ちっ！」

渋々武器を収めるシスさん。あー怖かった。切られたらどうしよう
かと思つたよ。街中でPKされるとか前代未聞すぎるからね。あと
切られたら実際に痛みとか感じるのかどうか不安で仕方がない。
プレイヤーは痛みを感じないけど、今の俺ならどうなのかかわからな
いからなあ。

セリア「ごめんなさい、このようなことがないように後で言ってお
きます」

といつつつ頭を下げるセリア。角度がすごい。マジ直角。下げすぎじゃね？

ていつかなんでこの子はこんなに礼儀正しいんだ。やっぱ教育かな？

「ま、それはいいとして魔物のいる場所を詳しく教えて」

セリア「退治してくださるのですか!？」

「任せとけ」

俺の言葉を聞いたセリアは素早く頭を上げる。漫画だとバツ!って
いう擬音が付きそうな勢い。

まあ、このゲームをやりはじめたばっかの頃にレベル上げとかでいろいろ世話になったからね。断る理由も別にないし。それに魔物退治って言えばなんかちょっと危なそうな響きだけど要はモンスターの狩ればいいんでしょ? アルパはレベル1〜50のプレイヤーの拠点だから、モンスターも大体そのレベルでしょ。レベル253の俺なら余裕だと思われ。

4話 彼はマップの外へ進出したようです(後書き)

こんにちは、アヲネギです。

こんな個性のあるNPCがいるオンラインゲームをやってみたいです
ねw

誤字脱字、分かりにくいところがあれば教えてください。
感想もお待ちします。

5話 初戦闘は案外すんなり終わったようです

はい、セリアから問題のモンスターがいる場所を教えてもらってやってきました。ダンジョンです！いやダンジョンではないか、街からすこし離れた場所にある廃墟の小屋です！ちなみに普通はワープゲートって場所からダンジョンや他の街に飛ぶよ。これはプレイヤのダンジョンや他の街へ行くための唯一の移動手段なんだけど、マップの外にそんなものがあるわけもないので歩いてきました。うん、自分でもびっくりだ。

普通に街から歩いて出られるとはねー

そして今俺は廃墟の小屋の前にあります。

えーっと、セリアの話によると例のモンスターは昼間はこの中にいて、夜になると出歩くらしい。あ、一応外見も聞いてきたよ。鎧を着た骸骨のような姿で、左手には錆びた盾を装備してて、右手には折れた剣を装備してるらしい。

あれだね、ボスモンスターのスケルトンナイトだと俺は予想してる。確か推奨レベルは20だった気がする。

ちなみにもうすぐ日没です。もう出歩いたあとだったらどうしようか。いつその日が昇るまで待とうかな？

「さて」

ボスモンスターとはいえ20レベル推奨だ。俺のメイン装備であるイベント限定の刀を装備してガチでやり合う必要もないだろう。上手くいけば素手で勝てるかもしれないよ。

ちなみにボスモンスターっていうのは普通のモンスターよりもかなり強いモンスターの事で、そのモンスターの推奨レベルの人がパーティーを組んで戦うのが普通。だけど今回みたいにかなり格下のボスモンスターなら一人で狩るのは余裕。

ギイイイイ

「来たか・・・！」

廃墟の小屋の扉が音を立てて開く。その音を聞いて俺は扉に向かって走り・・・

「そおおおおおい！」

バン！

開きそうな扉を蹴って閉める。うっへへ！

向こうにいるはずのモンスターは「え、ちょっと何？」みたいになってんのかと思うと笑えない？俺だけ？

まだ向こう側から扉を開けようとしてくるモンスター。もちろん俺は足で扉を押さえる。あの、片足の足の裏を扉にくっつけるような感じで。ていうか思ったよりもモンスターは力が強いな！このままじゃ逆に押し返されるよ！

「よし！」

アイテムバッグから銃を二つ取り出して両手に一つずつ持って扉に向けてひたすら撃つ。刀剣フレイム使いだったら威力はそんなに大きくないけど、今だったらどんなもんなんだろうね？ちなみにこの銃、結構

前に知り合いのレベル上げを手伝ったお礼にもらった物だよ。いないよって言ったのにそこそこレアな銃を二つもくれたんだよね。今なにしてんだろうねあの人。最近全く会わなくなっただけ。あとこの銃に付加されてる特殊効果がすごい。今左手に持つてるほうは攻撃がヒットしたら20%の確立で防御力を半減させる効果があつて、今右手に持つてるほうはクリティカル率30%つていう特殊効果が付加されてる。装備制限は120レベルだったはず。なかなか凶悪な組み合わせだね。この二つの銃。

さて、そろそろいいかな。

「だっしゃー！」

そのまま扉を蹴破つて小屋の中を確認する。あ、ちゃんと死んでるね。全身蜂の巣のスケルトンナイトが倒れてた。普通だったら死んだモンスターは消えるはずんだけどなんで死体が残ってるんだろ？そういうイベント・・・じゃないよなあ。

「ま、いいか」

さて、やることも終わったから街に戻ろうかな。

「・・・あ」

そうだ、どうせだからコイツの頭持つて行こう、銃弾が命中したのか、額に穴が二つほど開いてるけど別に問題ないかな？あ、あと折れた剣も。倒した証拠にはなるよね。セリアは疑ったりしなさそうだけど念のためね。

城の前までいくとセリアとあの怖い4人の兵士がいた。待つてくれたのかな？

セリア「それ・・・魔物を退治してくれたんですね！」

俺が持つてる額に穴の開いた頭蓋骨と折れた剣を見てセリアと周りの兵士は驚く。

「だね、以外と楽しかったよ」

セリア「ありがとうございます！」

いやだからそんなに頭さげしないでセリア。また直角になってるよ！そしてまたしても兵士の視線が怖い。別にセリアがいろいろ言うてるんだから言葉遣いなんて別にいいと思うんだけど。

セリア「なにかお礼がしたいのですが、なにか希望はありませんでしょうか？」

「お礼？お礼なあ・・・うーん」

そうは言われても特にいま欲しい物なんて特に・・・

あつた！あつたよ！

あれだ、家だよ！家はチート能力で作れるらしいけど、土地がないからなあ。

「結構デカイ要求だけど大丈夫？」

セリア「はい、魔物を退治してくれたお礼ですからどんなものでもいいんですよ」

笑顔で答えるセリア。笑顔が素敵だね！可愛いなあ！いや笑顔じゃない時も可愛いけどね？

「家が欲しいんだ。今日寝る場所すらなくて困ってるんだよね」

セリア「わかりました。しかし早くても明日になると思いますから、アヤノ様、今日は城に泊まっていてください」

おっとまさかの展開きたよ。やっべえ城に泊まるとか初めてなんだけど！って当たり前か！しかしテンションあがるねえ！うっへへ！ベッドとかすっげえフカフカなんだろうなあ！そっいえはこの世界にテレビってあるのかな？あつたらどんな番組とかやってるんだろうね？やっべえ今からすっげえ楽しみだ！

「あ、これどうすればいい？」

手に持つてる穴の開いた頭蓋骨と折れた剣の事だよ。俺はいらなからね。頭蓋骨とか持つても仕方ないし、折れた剣も同じく持つても仕方ない。

シス「俺が預かるっ」

両手を出してきたシスに穴の開いた頭蓋骨と折れた剣を渡す。こういうのってこのあとどうなるんだろうね？やっぱ捨てられちゃう感じかな？

・・・しかし兵士達の視線が痛いね。この人達なら目で殺すとかリアルにできんじゃない？

シス「さつきはすまなかつたな」

お、おお？まさかの謝罪？

「う、うす」

急すぎてなんか間抜けな返ししかできなかったよ。まあいいかな。

セリア「それでは、城の客室に案内させていただきますね。アヤノ様」

「お、おお・・・おお！」

客間に案内された俺テンションMAX！うわぁすっげー！マジ豪華！やっべえわこれは！うっはは！もうベッドにダイブしちゃう！

「フッフウー！」

やっべえフカフカすぎる！マジフカフカ！略してマフー！さらに略してマー！

セリア「ふふふっ！、アヤノ様、子供みたいですわね」

なんと、後ろにセリアがいました。気配を消して後ろに立つとかちよつと怖いぞ。声が聞こえた瞬間ちよつとビクッ！ってなっちゃったよ。

「やべえもう最高。この世界の初日でこんない所で寝られるとかちよつとテンション上がる」

びっくりしたことを悟られないようになるべく落ち着いて返事する。いや別に隠す必要はないんだけどね？

セリア「気に入られたようで私も嬉しいです」

またしても殺人的な笑顔でそんなことを言うセリア。可愛いなあーというか密室に女の子と二人とかなんか素晴らしい展開じゃね？しかし！彼女いない暦^{II}年齢の俺には何をすればいいのかいまいちわからない！なにもしないでいいのか！？いいのかこのままで！？何をするかわからない俺には選択肢なんてないわけだけど！つまり俺はこのチャンスを利用しますよ！ちくしょう！

セリア「ところでどんな風にあの魔物を退治したのですか？」

おつと、そんな事考えててもしかたないね。で、なんて言ってたっけ？魔物をどんな風に倒したのって感じの事だよね？くだらない事考えてて聞き逃しちゃったよ。

「小屋から出てこようとしてたところを銃を両手に扉ごと蜂の巣にした」

セリア「アヤノ様は刀剣使用フレイドでしたのに銃をお使いになられるので

すね」

あ、セリアは***^{アンソウン}の事は予知してないのかな？ いや、^{フレイト}刀剣使い
“でしたのに”^{アンソウン}って言うてるって事は***の事も知ってるのか
なあ。でも***^{アンソウン}の事をあんまり人に言っちゃったらまずいよう
な気がするんだよねえ。

「ま、俺がめっちゃイカすって事だな」

うん、適当なこと言って流そう。

セリア「流石です」

253レベルならアルパ周辺のモンスターに苦戦することはまずないからねえ。その辺を考えた上で家を要求したわけだし。やっぱり安全な場所で生活したいじゃん？ 景色とかはシンシウって街の方が好みなんだけど、敵のレベルが150〜200だからなあ。俺とは50レベル以上の差があると言ってもねえ？・・・正直なところ、ログインしたのがこの街だったからここでいいやと思っただけなんだけどね。こういうことはあまり深く考えない性格なんですよ俺は。要は寝られる場所があったらどこでもいいんです！

セリア「それではそろそろ戻りますね。今日は本当にありがとうございました」

扉を開いて部屋の外に出て、一度頭を下げしてから扉を閉めるセリア。律儀だねえ、軽く下げただけでもいいのに。ていうかもはや下げなくてもいいと思うんだけど。まあ、その辺も人によるのかもね。

「・・・あ」

そういえば街中で武器を装備できないって結構不便だね。プレイヤーのいる所ならともかくNPCしかいない場所だと今日みたいに刃物を突きつけられても何もできないわけだし。これもチート能力でどうにかできるのかな？あれなんて名前だったっけ？

「装備制限全エリア解除、アヤノ」

これでできてるかな？ちょっとアイテムバッグから何か適当な装備を取り出してみようか。なにがいいかな・・・さっきの銃でいいか。

・・・

・・・

・・・

よし、ちゃんと装備できる！

ちゃんと弾もでるよね？さすがにここじゃ試せないけど。窓でもあったらそこから空に向かって試し撃ちくらいはできたんだけど、この部屋には窓がないんだよね。残念残念。

しかしリアルに作られてるなあこの武器！かつけえ！

うん、やりたいこともやったし、今日はもう寝ようかな。

5話 初戦闘は案外すんなり終わったようです(後書き)

こんにちは、アヲネギです。

お気に入りが入りが10件超えました！ちょっとテンションあがりますね。

誤字脱字、分かりにくいところがあったら教えてください。

感想もお待ちしております。

6話 マイホームのようです

「おお・・・」

シス「昨日の夜遅くから寝ずに姫様がわざわざ選んでくださったのだ」

「おま・・・あの子寝てないの？」

シス「今は寝ている。姫様は街を救った英雄が随分気に入ってるよ
うだぞ」

「そんな大げさな・・・」

シス「ずっとお前の話しかしないぞ」

はい、現在シスに案内されて俺が頼んだ家を見に来ております。な
んでもセリアが直々に選んでくれたとか。しかし気に入られてると
は・・・なにもした覚えはないんだけど。

「ていうかこの家、入って大丈夫？」

ちなみに場所としては城の前の大通りのような場所に面してる空き
家。元は店だったらしいよこの家。結構な広さが期待できるよね！
テンションあがるぜ！

ああもう返事待たずに入るぜ！やつほおおおい！

「おお・・・いいんじゃない？いいんじゃないのこれ！？」

かなり広い！うっはー！すっげー！ただし家具は何もなし！まあ買うなり作るなりすればこの辺は問題ないか！さらに部屋の左の奥のほうの上に続く階段が！まさかの二階建てだと！？いや、待て。右の奥のほうには下に続く階段があるぞ！まさか地下室まであるというのか！

シス「思ったよりも広いな」

「だろ！？やっぱ広いよな！？フオオオオオオオオオ！」

シス「落ち着け。ていうかお前はこれからどうするんだ？」

あ、何も考えてなかった。そうだなあ、どうしようか。

「まずは家具とかを揃えて」

シス「それから？」

「次は食料とか買って」

シス「それから？」

「いやもうないけど」

シス「お前どうやって生活していくつもりだ？」

どうやってって・・・モンスターとか狩れば金はあつまるしどうにかなるんじゃないか？そもそも俺は金増やせるし！マジ億万長者！
・・・金増やしたりしてるのって運営にバレたりしてないよね？も

しバレたら・・・ああ考えるのはやめよう。バレたらバレた時だ。

「金ならあるんだ。生活には困らないでしょ」

シス「いやお前それなら自分で家を買えばよかっただろ」

えー、いやだつてお礼だし？あの時は特に欲しいものは家以外になかったし？やつぱ貰えるものは貰っておかないとね。それが家とかだとなおさらだよねえ？

「お礼は貰うものだけ？」

シス「それはまあ・・・そうだな。じゃあ俺はそろそろ仕事に戻るぞ」

「うす、お疲れー」

それじゃ、俺は家具を揃えようかな。ていうかどの辺に売ってるんだろう？マツプの外は全くわからんぜちくしょう。

「・・・あ」

やつべえ俺天才かもしれない。この家は元々お店だったんでしょ？てことは隣とかもお店なんじゃね？ていうかここは大通りに面してるわけだから近所さんが全部お店とかありえるんじゃない？やばくね？俺天才じゃね！？

さあさつそく見に行こうか！家具がどこに売ってるのかわからないけどそれはまあ近くを通りかかったNPCとかに聞けば教えてくれるよね！うっはは！

4時間後

ふう、ようやく家具を揃えたぜ。

「うん、いいじゃないか？いいんじゃないのこれ！フッフワー！イヤッハー！」

結構いい感じじゃねこれ！？部屋の真ん中に長方形のテーブルを置いてその奥には長いソファー！さらにテーブルの左端にはテレビも設置！そしてソファアの右斜め後ろには冷蔵庫！中身は人面リンゴやら百面ブドウやら食べ物がいっぱいだぜ！なぜか果物が売っているのしか見かけなかったから果物しかないけどね！

・・・まだ二階と地下室は殺風景なままだけど。

そうそう、この世界にも出前はあるらしくて、街中をうろろろしてたらチラシをもらったよ。そしてピザを頼んでみた。頼み方はチラシに載ってるNPCの名前宛てに注文を記入してショートメールを送るだけでいいらしい。というか実際そうだった。ええ、今俺はソファアに座ってテレビ見ながらピザ食べてます。マジアメリカ！フッフワー！

あ、この世界のテレビは基本的にアリーナ観戦の番組が多い。アリーナってというのはプレイヤー同士が戦える場所だね。PKとの違いは負けても何もアイテムを落とさないのと、勝つたびにお金を貰えるくらいかな。ああ、あと人数が決まってる。1：1か2：2か3：3か4：4のどれかだね。そうそう、アリーナはトーナメント形式で進んでいって優勝したらチャンピオンに挑戦できる権利を貰える

よ。ちなみにアリーナはアルパにしかない。

「レベル246対レベル241か・・・」

今俺は1：1形式の対戦をテレビで観戦してるよ。テレビをつけたら偶然レベル246の鎌使いフリッカーとレベル241の槍使いランサーの戦いが放送されてた。ちなみにレベルはなるべく差がなくなるようにできてるらしい。挑戦したことないからよく知らないけど。

あ、この世界のリモコンにチャンネルは4つしかないみたい。1を押せば1：1の試合が見れて、2を押せば2：2、といった具合。完全にアリーナ観戦用だね、この世界のテレビ。ちなみにCMはないみたい。

しかしこのピザ美味しいなあ。また今度頼もう。ちなみにこの出前ピザの料金は200ルゼだったよ。一番安い回復アイテムと同じ値段なんだよね。こんな美味しいのに200ルゼはお得だね！

「・・・おお！」

今テレビには槍使いランサーの使用したスキル『ミリオンスラスト』を紙一重で交わし続ける鎌使いフリッカーが写ってる。綺麗に避けるねえ、まさに魅せる戦い方だね！ちなみにスキル『ミリオンスラスト』は簡単に言うともものすごい速さの連続突き。なんと剣と槍の両方の武器に対応されてるといふ珍しいスキル。さっさと攻撃範囲から出るのが普通の避け方なのに、今テレビに映ってる鎌使いフリッカーは攻撃範囲から出ずに、攻撃を避け続けてる。かつこいいなあ！ていうかよくできるなあんな真似！大鎌を装備したままよくもまあ避けられるもんだ。

それにしてもピザ美味しいな。8切れあったのもう残り5切れだ。

・・・太らないよね？ゲームにそんなシステムないよね？

『おおっと！避ける避ける避けるうううう！すごい！これはすごいぞ！^{フリッカー}鎌使いのヴァンさんは一体どこでこんな技を見につけたというのか！』

そうそう、アリーナをテレビで見ると実況までついてるんだよね。これすごくない？

「・・・ん？」

ちょっと待って、今実況なんて言った？ヴァンって言ったよな？

「あー・・・服装とかモロだよなあ」

うん、知り合いです。黒いボロボのような服を身にまとったあの死神みたいな外見の鎌使い^{フリッカー}にはなんか見覚えがあるとは思っただよ！

ヴァンは俺と同じ時期にこのホロスオンラインをはじめた知り合いだよ。リアルは確か俺と同期だったはず。ちなみにヴァンのメイン装備はかなりエグい。俺のメイン装備とおなじでイベント限定装備だったかな。武器に付加されてるアビリティがかなり悪質なんだよなあ。ガード不可&攻撃がヒットしたら80%の確立で即死とかヤバくない？外見と相まってまさに死神だわ。さすがにアリーナではその装備は使っていないみたいだけど。

「それにしても懐かしいなあ、アイツ昔はアリーナ嫌ってたのに」
人って変わるんだね。びっくりだ。

『ここでヴァンさんが決めたあー！』

おお、勝ったみたいだね。ピザ食べてて見逃しちゃったよ。

「・・・久しぶりに会いに行くか」

テレビを消して家を出る。最後に会ったのはいつだったかな、もう覚えてないくらい前だわ。

6話 マイホームのようです(後書き)

こんにちは、アヲネギです。

もうすぐユニークが1000人です！

見てくれる人が多くてちょっとビビってますw

誤字脱字、分かりにくいところがあれば教えてください。
感想もお待ちしてます。

7話 彼女はストーカーのようです

「しまった、忘れてた」

家を出てきたまではよかった。でも今はマップの外。どうやってマップの内側に戻ればいいのかわからない！きた時と同じ方法で戻ろうと思ったけど今は昼間。街中をNPCがうろろしてるからなんか気まずいというか目立つのが嫌というか。人の多いところで建物を飛び越えるのはちょっとなあ・・・

うん、やっぱり帰ろう。ピザも食べてる途中だったし。

「なにしに出てきたんだか・・・」

ていうか帰るって言うほどの距離でもないんだけどね。家の扉の前だし。再び家の中に戻る俺。周りの人からみたら『コイツなんて出てきたの?』って感じだよな。あー恥ずかしい!

「ソファーやべえな!うっへへ!」

ソファーに座りピザを1切れ手にとってテレビをつけようとした時・

????「やあ、会いにきたよ」

テーブルの前にゴスロリ風の服をきた金髪ショートの人がいた。というか知り合だ。この子を知り合いと言いたくはないけどここ最近では一番よく会ってるプレイヤーなんだよね。

・・・いやいやいや、待って。ここってプレイヤーが立ち入れない

場所だよね？なんているのこの子。

????「君の考えてることを当ててあげようか？」

「いえ結構です帰ってくださいセシルさん」

コイツの名前はセシル。僕っ娘である。職業は大剣使い^{プレイヤー}。ここまでなら普通の可愛い子なんだけど、この子は重度のストーカーです。おまけに凄腕ハッカーです。もう3週間くらい前からストッキングされてます。誰か助けてください怖いです。最初の三日くらいは「やべえ可愛い子にストッキングされるとかちょっと嬉しい」とか思ってたけど3週間となってくると流石に怖い。ちなみにセシルのリアルは14歳らしいです。

セシル「なんでプレイヤーの立ち入れないエリアに僕がいるのか、でしょ？」

「聞いてないです大体想像つきますから帰ってくださいセシルさん」

ちなみにストッキングされるようになったきっかけはセシルがPKされそうなところを俺が助けたかららしい。助けなきゃよかったよ！普段しないことをしたらこれだよ！たまにはいいことをしようと思っただ俺のどこが悪いんだ！なぜこうなったし！

セシル「僕の改造スキルを使えばマップの外に出るなんて簡単なことなのさ」

「聞いてないです帰ってくださいセシルさん」

改造スキルっていうのは不正行為^{チート}で作成したスキルのことだよ。そ

んなに詳しくないけどね。

セシル「そんな僕を好きすぎて照れてしまってる君が家を買ったと聞いて今日は遊びに来たんだ」

なんかものすごく都合のいい解釈してしまってる！？いやまあ結構前からなんだけどね？これに若干慣れつつある自分が嫌だ。

そして家を買ったとかなんでこの子知ってるの？ちよつと怖いぞ。

「聞きません帰ってくださいセシルさん」

どうにかして逃げる手段は何かないのか！？ログアウトか！？ログアウトするか！？そうと決まればさっそくメニューを開いて・・・

ログアウトの項目がメニューから消えている・・・だと・・・

ああそうか、転生したからログアウトはできないのか！迂闊だった！これじゃセシルから逃げられない！しかもここじゃ周りには誰もいない！やばい！やばいぞ俺！何されるかわかんねえ！

セシル「素直じゃないなあ君は。でも僕は君のそんなところも好きだよ」

「ガチで怖いんではやく帰ってくださいセシルさん」

せめて俺が気づかないところに来てくれ！ストーキングするのは別にいいから！嫌だけど！

セシル「そんなことよりも一緒にテレビでも見ようじゃないか。その大きなソファアは隣に僕が座るために買ったんだろっ？」

「違いますベッドの代わりも兼ねて買ったんですこっちに来ないでください早く帰ってくださいセシルさん」

なぜかこの短距離でテレポートを使用してテーブルの前から俺の横に移動してくるセシル。もう意味がわからないMPの無駄遣いと思えない何がしたいのこの子早く帰ってほしい怖い。

そして俺の横に座りピザを一切れ手に取るセシル。

セシル「はい、あーん」

「いや今俺も自分のやつ食べてますそれ食べていいから早く帰ってくださいセシルさん」

・・・うん？

コイツはゲームの中で飯を食べてる俺に違和感はないのかな？

セシル「そんなに照れなくてもいいんだよ？ここには僕と君しかないんだから」

そんな事をいいながらセシルは自分の持っているピザを食べ・・・え？

セシル「どうしたんだい？僕が手をつけたピザが食べたいのかい？それならそうと言ってくれればいいのに。はい、あーん」

「いやそうじゃなくてお前・・・なんで食べれるの？」

俺の言っていることがイマイチ分かっていないのか首を傾げるセシ

ル。・・・可愛いとか思っけてない。断じて思っけてない！思っけてなるものか！

セシル「食べ物食べるためにあるんだよ？食べれて当然じゃないか。しかし美味しいねこのピザ」

毎回の事だけど、セシルに質問をしてもこんな感じで適当にははぐらかされるんだよね。ていうかこのゲームにご飯を食べるなんてシテムはないんだけどね。食べることは可能かもしれないけど味はわからないはず。なのにセシルはこのピザを美味しいって言った。つまり味が分かってるってことだ。

・・・やめよう。考えるのがめんどくさい。セシルがこのゲームの中でご飯を食べれるからなんだっていうんだ。俺には関係ないじゃん。

セシル「ふう、美味しかった。そういえば廃墟にいるモンスターを狩ったのは君なんだってね？」

ピザを食べ終わったセシルは指についたチーズを舐めている。ていうかピザって指にチーズつくことなんてある？俺は一回もないんだけど。

「なんで知っけてんだ？」

セシル「街中で噂になってるよ？アヤノ君が退治したって」

大げさだなあ、20レベルのボスモンスターくらい狩れるやつなんていくらでもいるでしょ。

「ていうか帰れ、もうピザ食べただろ？」

セシル「嫌だよ？」

即答かよ。

「いや頼むから帰ってくれマジで」

もうホント怖い。というかセシルがちょっと苦手。別に悪いやつではないんだけどね……

セシル「もう、なんでそんなに照れるんだい？」

いや照れてないけどね？帰って欲しいっていうのは素直な意見だけ？

セシル「仕方がないなあ。それじゃ今日のところは帰るよ」

ソファアに座ったままテレポートを使用して扉の前まで移動するセシル。いやだから歩けよそのくらい！

セシル「じゃ、またね」

……帰ったか。

「疲れた……」

別ににかしたわけじゃないんだけどね。

7話 彼女はストーカーのようです(後書き)

こんにちは、アヲネギです。

こついうストーカーのキャラが結構すきなんですよねw

誤字脱字、分かりにくいところがあったら教えてください。
感想もお待ちします。

8話 自宅で大乱闘のようです

「なるほど、これはなかなかイカすな」

セシルが帰った後、特にすることもなかったので散歩でもしようと思いい、外に出た。で、街の外までやってきました。場所としてか昨日の廃墟の小屋よりも少し先にの場所にある薄暗い森のような場所とりあえずモンスターを狩りたかった。アンノウン***は何の武器の威力が強くて何の武器の威力が弱いのかを知りたかったからね。

試した結果、『全ての武器の威力がどの職業よりも高い』というなんとモチートな結論に至りました、はい。まあアイテムバッグにあった装備だけしか試してないから全部とは言いい切れないんだけどね。でも銃の威力は俺と同じレベルの銃使いガンナーよりもかなり高かったし、刀の威力もかなり上がった。そしてモンスターを狩ってて気づいたんだけど、このモンスターは普通のアルパのモンスターよりも少し強い。多分HPとかは同じだと思っただけで攻撃速度が少しだけ速い。攻撃力もどんなもんか気になったけど痛かったら嫌だからやめた。

そんな事をしてたらもう夕方だよ。ここに来たときはまだ昼過ぎだったのに。でもまあアンノウン***についていろいろ知れたからいいか。それに時間はいくらでもあるんだ。この世界は学校もバイトも仕事もなにもない！マジ理想郷！フツフワー！

ていうかモンスター狩りすぎて周りが死体だらけな件。途中でテンション上がって殺しまくってたらレベルあがっちゃったよ。

・・・誰かに見られたら危ない趣味の人みたいに思われそうだ。一

人で『フツフウウ！フオオオウ！』とか叫びながら二丁拳銃ス
タイルで暴れたりメイン装備の刀で無双したりしてたんだよね。え
？いつもと変わらない？やかましいっ！いつもはもうちょっとマシ
だよ！

「それにしてもいい天気！夕焼けは景色の中で二番目に好きだぜ！」
意味もなく銃を装備して太陽目掛けて一発撃ってみる。どうみても
無駄な行動です、本当にありがとうございました。ちなみに一番好
きな景色は夜景です。月明かりとかマジ最高！これは夜景って言わ
ないのかな？まあいいか！

・・・今の行動も人に見られてたら完全に変な人だね。まあ、周
りを見回してみても後ろの木の陰に隠れてるセシルしか人はいない
しいつも通りか。もうセシルが後ろにすることがいつも通りになり
つつある自分が嫌だ。

「さて、帰るかな」

帰っても暇なんだよなあ、なにかすることはないものか。

セシル「やあ、そろそろ帰ってくると思ってて」

ボタン

扉を開いて家の中を確認したら何かいた。いや、気のせいかもしれ

ない。あれだけモンスター狩ったんだから疲れてるんだ、きつとそ
うだ。

さあ深呼吸して・・・よし！もう一度扉を開こう！

ガチャ

セシル「僕だよ」

ボタン

「・・・・・・・・」

あ、ありのまま今起こったことを話すぜ！『家に帰ってきたら何故か家の中にストーカーがいた』。な・・・何を言ってるのかわから
ねーと思うが俺も何が何だかわからなかった・・・頭がどうにかな
りそうだった・・・疲れていたとか幻覚とかそんなチャチなもんじ
やあ断じてねえ、もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ・・・

何故俺の家の中にいるんだアイツ。常に俺の後ろにいるわけではな
いということか！クソツ！迂闊だった！

・・・ま、いつまでも家の前にいるわけにもいかないよね。

扉を開いて家の中を念のためにもう一度確認する。

・・・

・・・

・・・

あれ、いないぞ？いないならいいんだけど。

部屋に入り、扉を閉める。

セシルがいるように見えたのは幻覚だったのかな？疲れていたとか幻覚とかそんなチャチなもんじゃあ断じてねえって言った直後に幻覚かい！

「選べるなら、もうちょっとマシな幻覚がよかつたんだだけ」

突然目の前が真っ暗になった。というか何かで両目を覆われた。ああダメだ、予想できてしまう。幻覚じゃなかったって事か！チクシヨウ！

セシル「だーれだ？」

「誰か当てたら帰ってきてくれるか？」

セシル「嫌だよ？」

またしても即答。

セシル「正解は僕でしたー」

俺の両目を覆っていた両手を外して後ろから抱きついてくるセシル。・・・声で誰なのかは分かってたけどね。その現実を認めたくなかつたんだ！

「やめる後ろから抱きつくな怖い」

セシル「前からならいいのかい？」

「ストーリーカー行為だけで満足しろよ」

ため息交じりに俺は言ってみる。

セシル「わかってないねアヤノ君は。僕はストーリーカーなんかじゃないんだよ？」

俺から離れて俺の前にレポートで移動するセシル。歩いて移動し
ると思うけどなんかもう慣れつつある。

というかストーリーカー以外のなにもでもないだろコイツは。人の後
をつける行為をストーリーカーと言わず何と言っんだ。

セシル「僕は純粹に君のことが好きなんだ。僕をPK達から救って
くれたあの日から僕は君に心奪われたのさ」

「純粹ではないな。お前は間違いなく歪んでる」

セシルを避けて奥にあるソファーに座り、まだ残ってる冷えたピザ
を一切れ手に取る。

あと心奪われたとか言うな。それは乙女座で武士道を貫いてるあの
人のセリフだ。劇場場の彼はマジカッコよかったね。

セシル「そんなに照れなくてもいいんだよ？」

テーブルの前までレポートで移動してきてピザを一切れ手に取る
セシル。

「やめるこつちにくるなピザはやるから回れ右して帰れ」

セシル「冷えてても美味しいねこのピザ。僕は好きだな」

笑顔で冷えたピザの感想を述べるセシル。

「いや聞いてな・・・セシル、今気づいたけど後ろの人は知り合いか？」

セシルの後ろに紺色のローブを着た長身の男がいた。俺のことをガシン見してて怖い。俺に言われて初めて気づいたのかセシルも後ろを見る。ていうか何時の間に家に入ってきたんだ。ドアが開くすらしなかったけど。

セシル「いいや知らないよ。誰だい僕とアヤノ君の二人だけの時間を邪魔したこの気味の悪い野郎は。君の知り合いかい？」

ぱたぱたと俺の横に歩いて移動してくるセシル。そして何故か俺の膝の上に座る。どいてくれと言いたいけど言えるような空気じゃない。

あともちろん知り合いじゃないよ。というかそんなにNPCしかないはずのエリアにプレイヤーは簡単に入れるものなの？セシルの改造スキルは意外と普及してるの？それともこの怖い人はNPCなの？

長身の男「君が、アヤノ君かね？姫様の予言の『異界から来た勇者』のアヤノ君かね？」

俺を見たまま長身の男が口を開く。なんかもう雰囲気怖いんだけど！ヤバい人なんじゃないのこの人！

「残念。俺はアヤノだけど勇者ではないな」

セシル「そうだよ。アヤノ君は僕の恋人さ」

「セシルちよつと黙ってる」

セシル「ごめんね？」

素直に謝った・・・だと・・・

やばい上目遣いで謝ってきたのをちよつと可愛いとか思ってしまった。思わず頭を撫でちゃってる俺どうしよう。チクシヨウ幸せそうな顔しやがって！

長身の男「噂によれば廃墟の小屋にいた魔物を退治したのは君だとか。アレは私が召喚した魔物だね」

そしてこの男は俺とセシルの今の状態を全く気にしていない様子で話を続けてる。なにこの状況すげえ。ていうか魔物の召喚なんてできるの？そんなスキル聞いたことないぞ。

長身の男「あのクラスの魔物を召喚するのは簡単ではなかったよ」

男の影が広がり、家の床全体に広がる。そして影に覆われた床から次々と魔物『スケルトン』が現れる。怖っ！どうなってんの！？どうなってんのこれ！？

ちなみにスケルトンはスケルトンナイトが弱体化したような感じで、外見もただの人骨が折れた剣や錆びた斧などを持っているだけ。適性レベルは10くらいだったような気がする。

長身の男「この程度の魔物ならいくらでも召喚できるのだがね」

「ログアウト、セシル」

咄嗟の判断。なんか危ない感じがするからあの発光野郎からもらったチート能力『システム・ワード支配者の言葉』を使用してセシルをログアウトさせた。

「人の家に魔物とかは呼ぶもんじゃないぜ？」

アイテムバッグから銃を一つ取り出してこの男の眉間に銃口を突きつけて三発ほど撃つ。ちなみに取り出した銃は攻撃がヒットしたら20%の確立で防御力を半減させる効果が付加されてる方だよ。ていうか思わず眉間を撃っちゃったけどこれで前科とかつくのかな？正当防衛とはならないかな？

「・・・どうなってんだ？」

銃を下げて男の眉間を確認したら無傷だった。おかしいな、避けられたって事はないんだけど。いや、無傷だったって事は前科はつかないから言ふべきなのかな？

長身の男「魔法で作った分身。と、言えば分かるかね？」

「『アナザイメージ』か」

アナザイメージっていうのはスキルの一つで、自分の分身を作り出すスキル。作り出された分身は作り出した時の装備で固定されるから、スキル使用者が装備を変更しても分身は装備が変わらない。あとダメージも受けない。ちなみにスキルのレベルが上がることに

消費するMPは減っていくよ。分身を作り出すときにMPを消費するのであって分身が存在してる間ずっとMPを消費するわけではないよ。

長身の男「では、お礼をさせていただこうか」

男の分身はそういつて消える。残ったのは家の中にいる大量のスケルトンだけ。あ、ドアに結界が張られてる。逃げられないって事ですねわかります。

「昔プレイしたゲームと同じような展開だな！」

アイテムバッグからクリティカル率30%の銃も取り出し、二丁拳銃スタイルで周りのスケルトンの頭を狙って撃っていく。

・・・あ、ダメだね。思ったよりも外れる。

「転生して二日目、初心者でもそんなに苦戦しないモンスター相手にこの刀を使うことになるとはね」

ソファーから立ち上がり、銃を二つともアイテムバッグにしまって、俺のメイン装備でもある刀を取り出す。ちなみに刀には『納刀状態』と『抜刀状態』の二つがある。『納刀状態』は名前の通り刀身を鞘に収めてる状態の事で、この状態での攻撃方法は基本的に鞘で相手を殴る、普通に相手を蹴るくらい。プレイヤーによつては鞘を腰に提げる人もいるけど、俺は鞘を利き手じゃない左手で持つ。これは昔プレイしてたゲームのキャラの影響だよ。で、『抜刀状態』は名前の通り刀を鞘から抜いた状態の事で、この状態だと刀を使って相手を攻撃することが可能。もちろん抜刀状態の方が相手に与えるダメージはデカいよ。あと刀のスキルは一つを除いて抜刀状態のものしかないんだよね。

「全滅するのが先か、俺がダメージを負うのが先か・・・」

スケルトンの数は20体前後。なんでこんなにいるんだか、そして俺の家広くね？20体もモンスターがいるのにまだまだスペースがあるんだぜ？セリアがなかなか広い家を選んでくれて助かったよ。刀を思う存分使えるからね。

ていうか家の中でモンスターと戦うとかね、もう完全に昔プレイしてたゲームの再現としか思えない。あの男は黒幕的なポジションで、刀を装備してる辺り俺は主人公の兄貴的なポジションかな？いや性格は弟の方に似てるかな、あの兄弟ほど俺はカッコよくないけど。まあどうでもいいね。

「ま、結果なんて見えてるけどな！」

ジャンプしてテーブルを飛び越え、着地点にいたスケルトンを踏みつけて粉々にする。

「フッフウー！想像以上に弱いなアンタら。思ったよりも楽に終わりそうだ」

8話 自宅で大乱闘のようです（後書き）

こんにちは、アヲネギです。

アヤノ君の言っていた『昔プレイしてたゲーム』が何のゲームか分かる人って何人くらいいますかね？w

多分この先もいろいろ似たような展開が予想されますw

誤字脱字、分かりにくいところがあれば教えてください。
感想もお待ちしてます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9672z/>

とある高校生がネトゲの世界に転生したようです

2012年1月6日03時50分発行